

症 例 報 告

エンビオマイシン過敏症の脱感作療法の1例

吉 本 五 勇・三 崎 和 哉・恒 石 和

国 立 高 知 療 養 所

金 相 大

三 重 県 三 浦 診 療 所

受付 昭和 52 年 4 月 14 日

A CASE REPORT ON DESENSITIZATION THERAPY
OF HYPERSENSITIVITY TO ENVIOMYCIN (EVM)

Kazuo YOSHIMOTO*, Kazuya MISAKI, Kazu TSUNEISHI and Soudae KIM

(Received for publication April 14, 1977)

This is a report on a case of the treatment of a pneumoconio tuberculous patient (64 years old, male) with Enviomycin (EVM). This patient had hypersensitivity to many drugs, but after success of desensitization to EVM, he has shown good progress.

The patient had been treated with SM after the successful desensitization to SM, but he produced resistance to SM and the decision was made to change the drug. At first, hypersensitivity to EVM was confirmed by skin test and the result was positive and then the desensitization to EVM was carried out. The procedure was started with one hundredths (10 mg) of the usual dose and every 3~4 days the dose was increased by 1/2~2 times of the previous dose.

Although such increase of dose was continued until reaching 500 mg on the 38th day, no hypersensitivity was observed. After this procedure, 1 g a day EVM was administered daily intramuscularly and at present the chemotherapy with the dose of 2 g a day twice a week is being continued.

As a result, the sputum converted to negative both on smear and culture and the patient has shown good progress.

Enviomycin (以後 EVM と略す) の抗結核作用についてはすでに多くの研究報告^{1)~7)}がなされており、昭和50年9月東洋醸造株式会社より発売され肺結核症診療に新しい役割を演ずることとなった。

以来、当所に入所療養中の難治結核患者に使用して治療を行なっているが、EVM に対しても過敏症が認められた症例に脱感作を行なつて、現在常用量を使用しうることに成功した1例を経験したので報告する。

症例 ■■■■■ 64歳男 じん肺結核

20年余、石工として就労。10年前よりじん肺集検を受けていて昭和46年秋、じん肺と診定され、管理Ⅱであつた。昭和47年7月、38~39℃の発熱が約1ヵ月続き、咳嗽激しく、某病院に受診、じん肺結核と診断され、SM・INH・PAS にて化療を開始したがアレルギー反応 (SM による発熱、PAS による発疹) があり、INH・EB・TH に変薬した。その後も培養にて結核菌陽性を継続したので入院を勧められ昭和47年11月6日当所に入所した。以後の経過を図に示した (図1)。

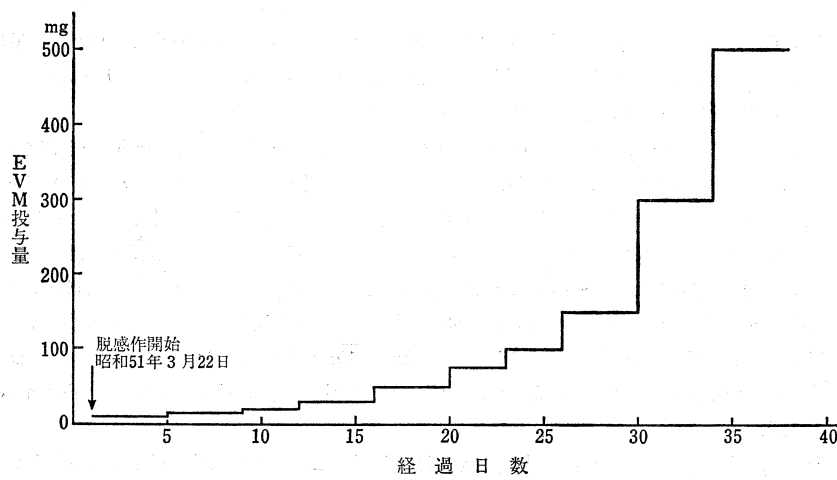
* From the Kochi National Sanatorium, Ike 65, Kochi 781-01 Japan.

図 1 経 過 表

		北○豊○ 64歳男 じん肺結核																											
年月	昭47	48											49	50	51	52													
	10	1	4	7	10								1	4	7	10	1	4	7	10	1								
臨床 事項 および 治療 内容	入所																												
	EB (視野狭窄のため投薬中止)																												
	処方するも服用せず																												
	TH (処方するも服用せず 脱感作)																												
	INH (処方するも服用せず 脱感作)																												
菌 検 査	RFP (耐性のため投薬中止)																												
	PAS																												
	SM (脱感作 (耐性のため投薬中止))																												
	EVM (脱感作)																												
		2		3		2		7		2		0		0															
塗抹培養		+3				+90		+300				+300		+40		-		-											

※：ガフキー号数

図 2 EVM 脱感作投与スケジュール



すなわち、引き続き INH・EB・TH にて治療を継続したが EB による視野狭窄のため RFP・INH に変薬するも菌の陰転化芳しからず、聞いてみるに化学剤により発疹、発熱、全身違和感等があるため服用していなかつたのことにて、1 剤ずつ確かめたところ、INH による過敏症と判明し、昭和48年7月2日より脱感作を開始し、昭和48年9月27日までかかつて漸く INH 0.3g まで服用可能となつた。その後 RFP に耐性出現し、SM・INH・PAS にて治療せんとするも以前の問診を考慮して SM 皮内反応を行なつたところ陽性なるため、昭和50年4月7日より脱感作を開始し、50年5月10日にて脱感作に成功した。ところが昭和50年12月 SM に耐性を生じ、排菌陽性となつた。ために EVM に変薬を考えた。ま

ず EVM 1g を注射用蒸留水 3.2 ml に溶解し、その 0.1 ml (EVM 25mg) を前腕に皮内注射して皮内反応を試みるに、注射 30 分後に前腕全体に発赤を認め、EVM にも反応陽性に現れ過敏症であることが判明したので昭和51年3月23日よりかつての自験例の方式に従つて脱感作を開始した (図2)。

すなわち常用量の 1/100 量の 10mg より始め、3～4 日ごとに前回の 1/2～2 倍量宛増量し、38 日目にて 500 mg まで使用するに過敏症現れず、以後毎日法にて 1g 宛筋注、現在 1日 2g 週 2 日法にて治療、昭和51年10月まで結核菌培養陰性、同12月まで塗抹陰性に経過しており、脱感作に成功し、常法にて化学療法を継続している。

考 察

抗結核剤アレルギーの脱感作療法については PAS, SM, INH アレルギーの脱感作療法についてすでに諸家により報告^{8)~13)}されており、われわれも数例を経験している。また副腎皮質ホルモンを併用した迅速脱感作法も報告^{14)~16)}されているが、向井らは同療法による脱感作中に結核性髄膜炎を併発して死亡した症例を報告¹⁷⁾しており、慎重を要することも唱えられている¹⁸⁾¹⁹⁾。われわれは日常の臨床の場においていろいろの経験から抗結核剤に過敏症を認める症例に遭遇するのであるが、多剤に過敏症を呈した1例に INH, SM, EVM それぞれの脱感作に成功した1例を経験したので報告した。

文 献

- 1) 豊原希一：結核，43：249，1968.
- 2) 大里敏雄・豊原希一：結核，46：59，1971.

- 3) 大里敏雄・豊原希一：結核，47：117，1972.
- 4) 山本和男他：結核，48：23，1973.
- 5) 国立療養所化学療法共同研究班：結核，48：129，1973.
- 6) 日本結核化学療法研究会：結核，48：47，1973.
- 7) 三輪太郎・束村道雄他：結核，50：229，1975.
- 8) 村中正中：アレルギー，13：445，1964.
- 9) 畑一郎：日本医事新報，No.1664：24，1956.
- 10) 前田甲子郎他：名古屋市立医大医学雑誌，10：516，1959.
- 11) 河辺秀雄：最新医学，10：76，1955.
- 12) 山崎俊幸：呼吸器診療，13：641，1958.
- 13) 甲斐義宏：日本化学療法学会雑誌，5：353，1957.
- 14) 藤井千秋他：日本臨床結核，18：565，1959.
- 15) 関根孝他：最新医学，15：1050，1960.
- 16) 鈴木一他：四国医学雑誌，17：89，1961.
- 17) 向井浚他：診療，12：1658，1959.
- 18) 本間日臣・佐藤裕：抗結核剤の副作用，文光堂，東京，1969.
- 19) 第一製薬編：結核診療の実際，1：135，1975.